

田野町文化財調査報告書 第48集

# 本野原遺跡一

県営農地保全整備事業元野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

岐阜県田野町教育委員会

田野町文化財調査報告書第48集 正誤表

頁	行	誤	正
目次	第100図 の変遷図	元野地区後・晚期 集落の分布図	元野地区後・晚期 集落の分布図
96	2		先頭に「SB-04」
96		P-3	P-4
96, 97		P-4	P-3
100		P-5	P-7
129	3	第85図	第86図
129	4	(SB-06)と(SB- 13, SB-09)と(SB- 14)	(SB-06, 13)と(SB- 09, 14)



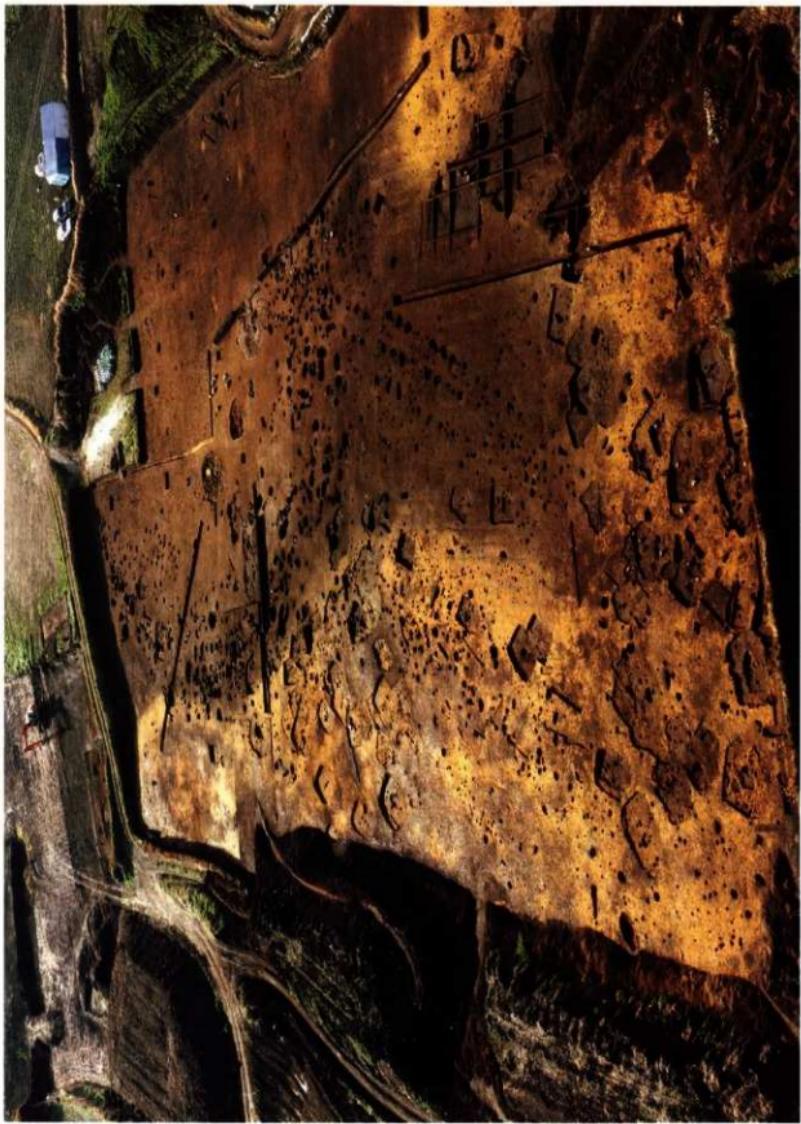
卷頭写真 1



卷頭写真 2



卷頭写真 3



# 序

田野町の中心地から南方に位置する本野原の台地上に、西日本では最大規模となる縄文時代後期（約4千年前）の遺跡が発掘されました。

これは、田野町教育委員会主体の発掘調査により発見されたものです。田野町民としては大変な驚きであり喜びでもありました。遺跡で特に注目される内容としては、

1つ目に、発掘された住居跡の軒数が113という数に上っており、西日本では最大級といえます。

2つ目に、3軒の列状掘立柱建物跡が発掘され、柱穴の規模は通常の掘立柱建物よりも遥かに規模が大きく、東日本で言われる大型掘立柱建物に類似しており、このような建造物は西日本では初例であるという事です。

3つ目に、縄文後期の関東地方で見られる土木工事跡が発掘されたと言うことであります。九州という遠隔地において関東地方で行われた土木工事が類似した状態で検出されることには極めて珍しく、驚くべき事例といえます。

4つ目に、多数の環状土坑が発掘され、その多くは墓葬と考えられますが、その一部は貯蔵穴や掘立柱建物の可能性もあると予想されています。

5つ目に、何万点にも上る多数の遺物が見つかっているということです。

6つ目に、本野原遺跡は西日本にありながら東日本の影響が強く反映されている事実です。

以上の素晴らしい特色のある遺跡を通して、四千年前に思いをはせますと、田野町の台地で縄文時代の人々が大きな文明の花を開花させていたんだなあと、感無量になります。さらに本野原遺跡の発掘を進めて、縄文遺跡が詳しく解明され日本の歴史文明の研究に、また、学校教育や社会教育の場で広く活用されんことを願って止みません。

最後になりましたが、遺跡の発掘にご協力御支援ご指導をいただきました地元の方々や、文化庁、県文化課、県中部農林振興局、土地改良連合会、農業開発公社の皆様方に心からお礼を申し上げます。

平成16年3月

田野町教育委員会

教育長 西田 英介

## 例　　言

1. 本書は平成13年度県営農地保全整備事業元野地区に伴い、宮崎県中部農林振興局の依頼を受けて実施した「本野原遺跡」の調査結果のうち、土坑を除いた遺構図面、遺構写真及び資料整理作業中である現段階の成果を記すものである。
2. 本遺跡の現地調査及び室内整理作業は、平成13・14年度は、宮崎県中部農林振興局からの受託事業を、文化庁の国庫補助事業を得て田野町教育委員会が実施した。平成15年度は、文化庁の国庫補助事業を得て田野町教育委員会が実施した。調査体制は以下のとおりである。

平成13年度（発掘調査及び概要報告書作成）

調査主体 宮崎県宮崎都田野町教育委員会

調査組織 田野町教育委員会 教育長

堀内 優（4～9月）

西田 英介（10～3月）

社会教育課長 永谷 弘

社会教育課長補佐 川越 修治

社会教育係長 後藤 敏典

調査事務担当 副主幹 松山 勝子

同主査 森田 浩史

調査担当 同主査 森田 浩史

同主任 金丸 武司

同調査員 久保 憲司

同調査員 吉住 さと子

調査指導 文化庁記念物課文化財調査官 岡村 道雄

調査支援業務 株式会社埋蔵文化財サポートシステム

九州航空株式会社

平成14年度（遺跡範囲確認調査及び資料整理）

調査主体 宮崎県宮崎都田野町教育委員会

調査組織 田野町教育委員会 教育長

西田 英介

教育次長兼社会教育課長 新坂 政光

社会教育課長補佐 川越 修治

社会教育係長 後藤 敏典

調査事務担当 副主幹 藤野 愛子

同主査 森田 浩史

調査担当 同主査 森田 浩史

同主任 金丸 武司

同調査員 吉住 さと子

調査指導 文化庁記念物課文化財調査官 檜宜田佳男

平成15年度（資料整理及び報告書作成）

調査主体 宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

調査組織	田野町教育委員会 教育長	西田 英介
	教育次長兼社会教育課長	新坂 政光
	社会教育課長補佐兼係長	松崎 孝二
調査事務担当	同副主幹	藤野 愛子
	同主査	森田 浩史
調査担当	同主査	森田 浩史
	同主任	金丸 武司
調査指導	文化庁記念物課文化財調査官	岡田 康博

3. 現地の作業員として、田野町内の方々から多数の参加をいただいた。

4. 室内整理作業の実施にあたり、下記の方々の協力を得た。

5. 作業の分担は、以下のとおりである。

(現地) 遺構実測	屋外作業員及び株式会社埋蔵文化財サポートシステム等
遺構写真撮影	調査員及び屋外作業員
航空写真撮影	九州航空株式会社
(室内) 遺物実測・トレース	金丸及び室内整理作業員
図面作成	金丸及び室内整理作業員
観察表作成	金丸及び室内整理作業員

6. 執筆・編集は森田・金丸が行った。

7. 方位は磁北、標高は海拔絶対高である。

8. 色調表示は、農水省農林水産技術会議事務局監修の『標準土色帖』の表示に従った。

9. 遺構略号は、宮崎で一般的に用いられる宮崎学園都市遺跡調査時の表示に従った。具体的には以下のとおりである。

竪穴住居：S A、掘立柱建物：S B、土坑：S C、ピット：S P、集石遺構：S I

中央配石、道路状遺構、埋甕等、表示基準のない場合はそのまま記した。なお、竪穴状遺構は、用途不明であることを考慮しS Xを用いた。

10. 遺跡の説明及び考察を行うにあたっては、便宜的に旧石器時代、縄文時代早期、前期～中期前葉、中期後葉～晚期、平安時代、中世に分割した。

11. 本書の作成にあたっては、以下の方々にご指導・ご協力を賜った（五十音順・敬称略）

秋成雅博・石井寛・石橋一恵・猪瀬美奈子・今田秀樹・岩永哲夫・江原英・面高哲朗・黒川忠広・来畑光博・栗原淳・重留康宏・肯付和樹・橋呂信・野間重孝・初山孝行・松林豊樹・松本茂・三宅教氣・村田六郎太

12. 出土遺物及び図面や写真等の記録類は、田野町教育委員会で保管している。

# 目 次

- 卷頭写真 1 本野原遺跡航空写真（遠景・北から）  
卷頭写真 2 本野原遺跡航空写真（遠景・南西から）  
卷頭写真 3 本野原遺跡航空写真（遺構検出状況・真上）  
卷頭写真 4 本野原遺跡航空写真（遺構検出状況・北西から）

## 本文目次

第Ⅰ章 序説	1
第1節 位置と環境	1
a. 本野原台地の位置と地形	1
b. 本野原周辺の遺跡分布	1
c. 本野原遺跡周辺の縄文後・晩期遺跡	3
第2節 調査の略歴	5
第Ⅱ章 調査の結果	17
第1節 調査の概略	17
第2節 時代別の概要	19
a. 旧石器時代	19
b. 縄文時代早期	19
c. 縄文時代前期～中期前葉	25
d. 縄文時代中期後葉～晩期	25
e. 古代	127
f. 中世	129
g. 遺跡範囲確認調査	130
第3章 中間まとめ	131
a. 旧石器時代	131
b. 縄文早期	131
c. 縄文前期～中期前葉	132
d. 縄文中期後葉～晩期	132

## 図版目次

第 1 図 調査区内景観の変遷（イラスト）	1
第 2 図 本野原遺跡位置図	2
第 3 図 昭和46年宮崎大学トレンチ設定位置図	6
第 4 図 平成3～6年度トレンチ設定位置図	7
第 5 図 平成12年度トレンチ設定位置図	8
第 6 図 平成13年度調査区位置図	13
第 7 図 旧石器時代遺物実測図	18
第 8 図 縄文早期遺構分布図	20
第 9 図 集石遺構実測図（1）	21
第10 図 集石遺構実測図（2）	22
第11 図 集石遺構実測図（3）	23
第12 図 集石遺構実測図（4）	24
第13 図 壁穴住居実測図（1）	26
第14 図 壁穴住居実測図（2）	27

第 15 図	豎穴住居実測図 (3)	29
第 16 図	豎穴住居実測図 (4)	30
第 17 図	豎穴住居実測図 (5)	31
第 18 図	豎穴住居実測図 (6)	32
第 19 図	豎穴住居実測図 (7)	33
第 20 図	豎穴住居実測図 (8)	35
第 21 図	豎穴住居実測図 (9)	36
第 22 図	豎穴住居実測図 (10)	37
第 23 図	豎穴住居実測図 (11)	38
第 24 図	豎穴住居実測図 (12)	39
第 25 図	豎穴住居実測図 (13)	40
第 26 図	豎穴住居実測図 (14)	41
第 27 図	豎穴住居実測図 (15)	44
第 28 図	豎穴住居実測図 (16)	46
第 29 図	豎穴住居実測図 (17)	47
第 30 図	豎穴住居実測図 (18)	48
第 31 図	豎穴住居実測図 (19)	49
第 32 図	豎穴住居実測図 (20)	55
第 33 図	豎穴住居実測図 (21)	56
第 34 図	豎穴住居実測図 (22)	57
第 35 図	豎穴住居実測図 (23)	58
第 36 図	豎穴住居実測図 (24)	61
第 37 図	豎穴住居実測図 (25)	63
第 38 図	豎穴住居実測図 (26)	64
第 39 図	豎穴住居実測図 (27)	65
第 40 図	豎穴住居実測図 (28)	66
第 41 図	豎穴住居実測図 (29)	67
第 42 図	豎穴住居実測図 (30)	70
第 43 図	豎穴住居実測図 (31)	72
第 44 図	豎穴住居実測図 (32)	73
第 45 図	豎穴住居実測図 (33)	75
第 46 図	豎穴住居実測図 (34)	77
第 47 図	豎穴住居実測図 (35)	78
第 48 図	列状掘立柱建物全体図	82
第 49 図	列状掘立柱建物実測図 (1)	83
第 50 図	列状掘立柱建物実測図 (2)	84
第 51 図	列状掘立柱建物実測図 (3)	85
第 52 図	列状掘立柱建物実測図 (4)	86
第 53 図	列状掘立柱建物実測図 (5)	87
第 54 図	列状掘立柱建物実測図 (6)	88
第 55 図	列状掘立柱建物実測図 (7)	89
第 56 図	列状掘立柱建物実測図 (8)	90
第 57 図	列状掘立柱建物実測図 (9)	91
第 58 図	列状掘立柱建物実測図 (10)	92
第 59 図	列状掘立柱建物実測図 (11)	93

第 60 図	列状掘立柱建物実測図 (12) .....	94
第 61 図	窪地造構土層断面照合図及び整地範囲 (予想含む) .....	101
第 62 図	窪地造構土層断面図 (1) .....	102
第 63 図	窪地造構土層断面図 (2) .....	103
第 64 図	中央配石実測図 .....	104
第 65 図	窪地造構中央部造構分布図 .....	105
第 66 図	堅穴状造構実測図 (1) .....	106
第 67 図	堅穴状造構実測図 (2) .....	107
第 68 図	堅穴状造構実測図 (3) .....	108
第 69 図	堅穴状造構実測図 (4) .....	109
第 70 図	南東傾斜面土器廃棄場出土土器 (1) .....	110
第 71 図	南東傾斜面土器廃棄場出土土器 (2) .....	111
第 72 図	南東傾斜面土層柱状模式図 .....	112
第 73 図	道路状造構-01実測図 .....	113
第 74 図	道路状造構-01土層断面図 .....	114
第 75 図	道路状造構-02実測図 .....	115
第 76 図	道路状造構-02土層断面図 .....	116
第 77 図	埋甕実測図 .....	117
第 78 図	土坑実測図 (1) .....	118
第 79 図	土坑実測図 (2) .....	119
第 80 図	土坑分類別分布図 .....	120
第 81 図	古代造構分布図 .....	125
第 82 図	堅穴住居実測図 (36) .....	126
第 83 図	掘立柱建物実測図 (1) .....	127
第 84 図	掘立柱建物実測図 (2) .....	128
第 85 図	中世造構分布図 .....	129
第 86 図	中世掘立柱建物群分布図 .....	130
第 87 図	窪地造構内土層堆積模式図 .....	133
第 88 図	窪地造構南側上層堆積模式図 (1) .....	134
第 89 図	窪地造構北側土層堆積模式図 (2) .....	135
第 90 図	調査区内造構の変遷図 (I 期) .....	141
第 91 図	調査区内造構の変遷図 (II 期) .....	141
第 92 図	調査区内造構の変遷図 (III 期) .....	142
第 93 図	調査区内造構の変遷図 (IV 期) .....	142
第 94 図	調査区内造構の変遷図 (V 期) .....	143
第 95 図	調査区内造構の変遷図 (VI 期) .....	143
第 96 図	調査区内造構の変遷図 (VII 期) .....	144
第 97 図	調査区内造構の変遷図 (VIII 期) .....	144
第 98 図	調査区内造構の変遷図 (IX 期) .....	145
第 99 図	調査区内造構の分布図 (X 期) .....	145
第100図	元野地区後期集落の変遷図 .....	146
第101図	鹿頭形土製品実測図 .....	奥付

## 表目次

表 1	平成12年度3月トレンチ 土層柱状模式図（1）	10
表 2	平成12年度3月トレンチ 土層柱状模式図（2）	11
表 3	本野原遺跡調査の動き	12
表 4	平成13年度 遺跡範囲確認トレンチ 土層柱状模式図（1）	14
表 5	平成13年度 遺跡範囲確認トレンチ 土層柱状模式図（2）	15
表 6	旧石器時代遺物観察表	18
表 7	集石遺構観察表	24
表 8	竪穴住居覆土注記（1）	34
表 9	竪穴住居覆土注記（2）	42
表10	竪穴住居覆土注記（3）	62
表11	竪穴住居覆土注記（4）	69
表12	竪穴住居覆土注記（5）	74
表13	竪穴住居観察表（1）	80
表14	竪穴住居観察表（2）	81
表15	列状掘立柱建物観察表	95
表16	列状掘立柱建物覆土注記（1）	96
表17	列状掘立柱建物覆土注記（2）	97
表18	列状掘立柱建物覆土注記（3）	98
表19	列状掘立柱建物覆土注記（4）	99
表20	列状掘立柱建物覆土注記（5）	100
表21	中央配石観察表	104
表22	竪穴状遺構観察表	104
表23	土坑観察表（1）	121
表24	土坑観察表（2）	122
表25	土坑観察表（3）	123
表26	土坑観察表（4）	124
表27	遺構構築時期照合表	147

## 写真図版目次

図版 1	集石遺構検出状況（B, C区）	151
図版 2	集石遺構検出状況（S I - 01～03）	152
図版 3	集石遺構検出状況（S I - 04）	153
図版 4	集石遺構検出状況（S I - 04～07, 09, 11）	154
図版 5	集石遺構検出状況（S I - 06, 07, 13, 14）	155
図版 6	集石遺構検出状況（S I - 08, 12, 13）	156
図版 7	環状土坑群検出状況	157
図版 8	環状土坑群・南東傾斜面検出状況	158
図版 9	環状土坑群検出状況	159
図版 10	環状土坑群検出状況	160
図版 11	環状土坑群検出状況	161
図版 12	環状土坑群検出状況	162
図版 13	環状土坑群検出状況	163
図版 14	D区窪地遺構検出状況	164
図版 15	D区窪地遺構検出状況	165

图版16	D区墓地遗構検出状況	166
图版17	D区墓地遺構検出状況	167
图版18	E, F区遺構検出状況	168
图版19	B区遺構検出状況	169
图版20	C区西壁上層断面状況	170
图版21	C区西壁土層断面状況	171
图版22	C区西壁土層断面状況	172
图版23	C区南壁土層断面状況	173
图版24	C区南壁土層断面状況	174
图版25	土層断面状況（C区南壁・断面H-H'）	175
图版26	土層断面状況（断面I-I'・断面H-H'）	176
图版27	土層断面状況（断面F-F'・断面E-E'）	177
图版28	台地北側 土層断面状況	178
图版29	豎穴住居写真（S A - 01, 03）	179
图版30	豎穴住居写真（S A - 03）	180
图版31	豎穴住居写真（S A - 03, 04）	181
图版32	豎穴住居写真（S A - 04, 05）	182
图版33	豎穴住居写真（S A - 05, 06）	183
图版34	豎穴住居写真（S A - 07, 08）	184
图版35	豎穴住居写真（S A - 08）	185
图版36	豎穴住居写真（S A - 08）	186
图版37	豎穴住居写真（S A - 08, 09, 10）	187
图版38	豎穴住居写真（S A - 10, 11）	188
图版39	豎穴住居写真（S A - 11）	189
图版40	豎穴住居写真（S A - 12, 13）	190
图版41	豎穴住居写真（S A - 13）	191
图版42	豎穴住居写真（S A - 13）	192
图版43	豎穴住居写真（S A - 15）	193
图版44	豎穴住居写真（S A - 16, 17）	194
图版45	豎穴住居写真（S A - 18, 19）	195
图版46	豎穴住居写真（S A - 19~21）	196
图版47	豎穴住居写真（S A - 21, 22, 26）	197
图版48	豎穴住居写真（S A - 27, 28）	198
图版49	豎穴住居写真（S A - 06, 44~51）	199
图版50	豎穴住居写真（S A - 53, 54）	200
图版51	豎穴住居写真（S A - 22~26）	201
图版52	豎穴住居写真（S A - 23~25）	202
图版53	豎穴住居写真（S A - 23~25）	203
图版54	豎穴住居写真（S A - 23~25, 27, 28）	204
图版55	豎穴住居写真（S A - 27~31, 64, 65）	205
图版56	豎穴住居写真（S A - 29~31, 64, 65）	206
图版57	豎穴住居写真（S A - 29~31, 64, 65）	207
图版58	豎穴住居写真（S A - 29~32, 64, 65）	208
图版59	豎穴住居写真（S A - 33, 34）	209
图版60	豎穴住居写真（S A - 34）	210

図版61	豎穴住居写真 (S A - 06, 36~61) .....	211
図版62	豎穴住居写真 (S A - 34~61) .....	212
図版63	豎穴住居写真 (S A - 36~38, 46~51) .....	213
図版64	豎穴住居写真 (S A - 06, 39~43, 53, 54, 56) .....	214
図版65	豎穴住居写真 (S A - 36~61) .....	215
図版66	豎穴住居写真 (S A - 44, 45, 58, 62) .....	216
図版67	豎穴住居写真 (S A - 62, 63) .....	217
図版68	豎穴住居写真 (S A - 63, 66~69, 71) .....	218
図版69	豎穴住居写真 (S A - 66~69) .....	219
図版70	豎穴住居写真 (S A - 66~69) .....	220
図版71	豎穴住居写真 (S A - 70, 85) .....	221
図版72	豎穴住居写真 (S A - 70, 85) .....	222
図版73	豎穴住居写真 (S A - 70~74) .....	223
図版74	豎穴住居写真 (S A - 72~74) .....	224
図版75	豎穴住居写真 (S A - 72~76) .....	225
図版76	豎穴住居写真 (S A - 75, 77~81) .....	226
図版77	豎穴住居写真 (S A - 77~81) .....	227
図版78	豎穴住居写真 (S A - 82, 83, 90~96) .....	228
図版79	豎穴住居写真 (S A - 82, 83, 90~96, 100, 101) .....	229
図版80	豎穴住居写真 (S A - 82, 83, 90~96) .....	230
図版81	豎穴住居写真 (S A - 86) .....	231
図版82	豎穴住居写真 (S A - 84, 87, 100, 101) .....	232
図版83	豎穴住居写真 (S A - 88, 89) .....	233
図版84	豎穴住居写真 (S A - 100, 101, 103) .....	234
図版85	豎穴住居写真 (S A - 104~107) .....	235
図版86	列状掘立柱建物検出状況 .....	236
図版87	列状掘立柱建物写真 (S B - 03・全体, P 1, P 2) .....	237
図版88	列状掘立柱建物写真 (S B - 03・P 3, P 4) .....	238
図版89	列状掘立柱建物写真 (S B - 03・P 4~P 6) .....	239
図版90	列状掘立柱建物写真 (S B - 03・P 5, P 6) .....	240
図版91	列状掘立柱建物写真 (S B - 03・P 7, P 8 S B - 04・全体) .....	241
図版92	列状掘立柱建物写真 (S B - 04・P 1, P 2) .....	242
図版93	列状掘立柱建物写真 (S B - 04・P 2~P 5) .....	243
図版94	列状掘立柱建物写真 (S B - 04・P 6, P 7) .....	244
図版95	列状掘立柱建物写真 (S B - 04・P 6~P 8) .....	245
図版96	列状掘立柱建物写真 (S B - 04・P 8, P 9) .....	246
図版97	列状掘立柱建物写真 (S B - 05・全体, P 1, P 2) .....	247
図版98	列状掘立柱建物写真 (S B - 05・P 3~P 7) .....	248
図版99	列状掘立柱建物写真 (S B - 05・P 8~P 12) .....	249
図版100	中央配石検出状況 .....	250
図版101	中央配石検出状況 .....	251
図版102	中央配石検出状況 .....	252
図版103	中央配石検出状況 .....	253
図版104	豎穴状遺構 (S X - 02, 03) .....	254
図版105	豎穴状遺構 (S X - 03) .....	255

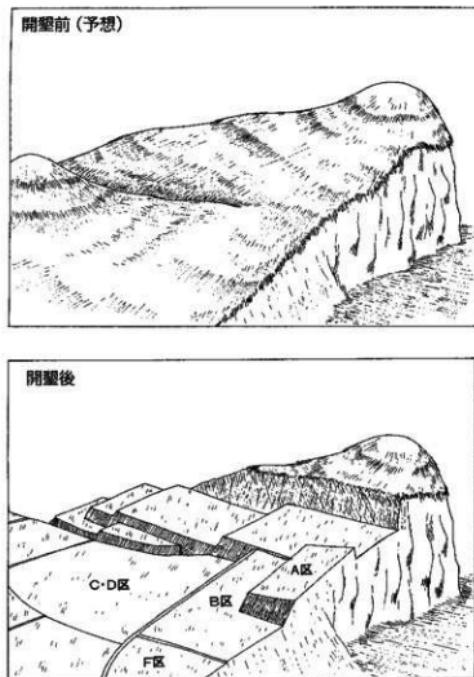
図版 106	堅穴状遺構 (S X - 03) .....	256
図版 107	堅穴状遺構 (S X - 04) .....	257
図版 108	堅穴状遺構 (S X - 04, 05) .....	258
図版 109	南東部土器廃棄場出土状況.....	259
図版 110	南東部土器廃棄場出土状況.....	260
図版 111	南東部土器廃棄場出土状況.....	261
図版 112	南東部土器廃棄場出土状況.....	262
図版 113	南東部土器廃棄場出土状況.....	263
図版 114	南東部土器廃棄場出土状況.....	264
図版 115	南東部土器廃棄場出土状況.....	265
図版 116	南東部土器廃棄場出土状況.....	266
図版 117	南東部土器廃棄場出土状況.....	267
図版 118	南東部土器廃棄場出土状況.....	268
図版 119	南東部土器廃棄場出土状況.....	269
図版 120	南東部土器廃棄場出土状況.....	270
図版 121	南東部土器廃棄場出土状況.....	271
図版 122	道路状遺構全景.....	272
図版 123	道路状遺構土層断面.....	273
図版 124	埋甕-01 .....	274
図版 125	埋甕-01, 02 .....	275
図版 126	出土状況、調査トレンド .....	276
図版 127	古代・中世 (S A - 02) .....	277
図版 128	古代・中世 (S A - 02・出土状況) .....	278
図版 129	古代・中世 (出土状況・調査風景・掘立柱建物群) .....	279
図版 130	古代・中世 (S B - 06~11) .....	280
図版 131	古代・中世 (S B - 12~14) .....	281
図版 132	その他 (作業風景) .....	282

## 付 図

- 付図 1 縄文時代遺構分布図 (1)
- 付図 2 縄文時代遺構分布図 (2)
- 付図 3 縄文時代後期遺物包含層下位の等高線図
- 付図 4 縄文時代後期遺物包含層下位の堆積層
- 付図 5 縄文時代遺構分布図 (3) (掘立柱建物)
- 付図 6 堅穴住居実測図 (37)

(題字) 田野町教育長 西山 英介

# 第Ⅰ章 序 説



第1図 調査区内景観の変遷(イラスト)

元野地区)は、先史時代遺跡の多く分布する田野町でも、密集する地区として知られている。

本野原遺跡南側の楠原地区に立地する畠田遺跡(文献1)は、近世を主体としているが、アカホヤ火山灰直下の条痕土器や、晩期の組織痕土器も少量出土している。更に、本野原遺跡の西方には、旧石器時代から縄文早期全般の遺物が出土し、なかでも縄文早期後半～前期初頭の遺物を多量に出土した黒草第2遺跡(文献2)が、その北西には100基を超える集石遺構と、縄文早期中葉を中心として、旧石器時代、縄文草創期、前期、中期の遺物が確認された元野河内遺跡(文献3)が立地する。また、本野原遺跡の対岸に広がる高野原台地の河岸段丘第1段には、縄文中期を最盛期として縄文前期から後期にかけて遺物が確認されたほか、弥生中～後期の集落跡も検出された本野遺跡(文献4)が、第2段には、縄文早期、前期、中期の遺物が出土したほか、後期末から晩期初頭にかけて、竪穴住居や掘立

## 第1節 位置と環境

### a. 本野原台地の位置と地形

本野原遺跡は、宮崎市と都城市の中間にあたる田野町の南部に位置する。今年度の調査区は、河川の合流点に向けて東側に延びる、標高180m前後の、起伏の大きい台地上の東側である。

全面調査が行われた地点は、近年行なわれた開墾により、地形が大きく変化している。開墾前は、台地南東端部に位置する丘陵の西側の尾根はA区と繋がっていたほか、北部にも緩やかな傾斜面を形成していた。また、丘陵は調査区の北部に位置する台地突出部にも存在していた。それ以外にも、調査区東部は、C区東部の湧水点から流れる川によって、台地を東西に分断するよう刻まれた深い谷が存在していた。

### b. 本野原周辺の遺跡分布

本野原遺跡周辺(黒草・楠原・



本野原遺跡

- 1, 本野原遺跡
  - 2, 高野原遺跡
  - 3, 本野遺跡
  - 4, 元野河内遺跡
  - 5, 黒草第2遺跡
  - 6, 畑田遺跡
  - 7, 丸野第2遺跡
  - 8, 青木遺跡
  - 9, 前平地区遺跡
- (縮尺：6万分の1)



第2図 本野原遺跡位置図

柱建物が多数展開し、更に弥生中～後期の集落跡、地下式横穴墓が検出された高野原遺跡（A～G区）（文献5）が立地する。

このように、元野地区及びその周辺は、縄文早期にピークがありながらも、旧石器時代から縄文晩期に至るまで、遺跡がほぼ継続する状況を認めることができる。また、弥生時代以降も、断続的ながら集落が出現している。

#### c. 本野原遺跡周辺の縄文後・晚期遺跡

本野原遺跡の北方約2kmに位置する七野台地の最奥部には、弧状に分布する31軒の堅穴住居が検出された丸野第2遺跡（文献6）が立地する。出土土器の主体は岩崎式、指宿式、市来式、丸尾式であった。本野原遺跡の東方約2kmに位置する清武川の河岸段丘上に立地する青木遺跡（文献7）は、岩崎式、指宿式を主体とし、市来式が少量出土している。検出された配石遺構は、敷石住居であった可能性が高い（註1）。

青木遺跡の北を流れる清武川の下流には、堅穴住居を51軒検出した竹ノ内遺跡（文献8）が立地する。主体は市来式から丸尾式であり、岩崎式、指宿式、黒色磨研土器が一定量出土した。また、竹ノ内遺跡の北へ約2kmの台地上には、岩崎式から市来式を主体とする上の原第2遺跡、晚期中葉の黒色磨研土器を主体とする上の原第1遺跡（文献9）が隣接する。他に、竹ノ内遺跡の南へ約3kmの水無川河岸段丘上には、晚期前葉～中葉を主体とする田代堀第2遺跡（文献10）が立地する。

田代堀第2遺跡の東に立地する宮崎学園都市遺跡群には、堅穴住居を67軒検出した平畑遺跡（文献11）が立地する。主体は縄文後期末～晚期中葉である。更に清武川の河口から南へ約3kmの、海岸から一段高くなった地点には、混貝土層より指宿式から黒川式まで多量の遺物が出土した松添貝塚（文献12）が立地し、西側には、後期後葉から晚期全体の遺物を多く出土した松添遺跡が隣接する。更に南には、指宿式、孔列文、組織痕土器を主体とし、堅穴住居を2軒検出した右葛ヶ迫遺跡（文献13）が立地する。また、同遺跡の南へ約1kmの台地上には、貝穀文系土器最終末である納屋向タイプの標識遺跡となった納屋向遺跡（文献14）も立地する。

北部にも、岩崎式と共に後期初頭の中津式が出土した橋山第1遺跡（文献15）や、綾式土器の標識遺跡となった尾立遺跡（文献16）、後期末から晚期初頭の一括性の高い遺物が出土した学頭遺跡（文献17）など、後・晚期の良好な遺跡が立地するが、分布は疎らであり、本野原遺跡付近を流れる清武川の河岸段丘や河口付近に、宮崎県を代表的する縄文後期遺跡が集中することは、本野原遺跡の成立背景を考える上で重要な鍵になると思われる。

#### （参考文献）

- 文献1：田野町教育委員会 2001「畑山遺跡」『田野町文化財調査報告書』第40集
- 文献2：田野町教育委員会 2004「黒川第2遺跡」『田野町文化財調査報告書』第49集
- 文献3：田野町教育委員会 2001「元野河内遺跡」『田野町文化財調査報告書』第39集
- 文献4：田野町教育委員会 1999「本野遺跡（縄文時代遺物編）」『田野町文化財調査報告書』第32集

- 田野町教育委員会 2000「本野遺跡（2）」「田野町文化財調査報告書」第33集
- 文献5：田野町教育委員会 2000「高野原遺跡（A区）」「田野町文化財調査報告書」第34集
- 田野町教育委員会 2000「高野原遺跡（E～G区）」「田野町文化財調査報告書」第36集
- 田野町教育委員会 2000「高野原遺跡B・C区（掘立柱建物図面・図版編）」「田野町文化財調査報告書」第35集
- 田野町教育委員会 2003「高野原遺跡B・C区（竪穴住居図面・図版編）」「田野町文化財調査報告書」第45集
- 田野町教育委員会 2003「高野原遺跡B・C区（弥生時代の調査）」「田野町文化財調査報告書」第46集
- 文献6：田野町教育委員会 1990「丸野第2遺跡」「田野町文化財調査報告書」第11集
- 文献7：鈴木重治 1963「宮崎県宮崎郡田野町青木遺跡」「日本考古学年報」16
- 文献8：宮崎県埋蔵文化財センター 2000  
「竹ノ内遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第27集
- 文献9：宮崎県埋蔵文化財センター 2000  
「上の原第2遺跡 上の原第1遺跡 上の原第4遺跡 白ヶ野第3遺跡A地区」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第25集
- 文献10：清武町教育委員会 1993「角上原遺跡群II」「清武町埋蔵文化財調査報告書」第4集
- 文献11：宮崎県教育委員会 1985「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書」第二集
- 文献12：宮崎市教育委員会 1999「松添貝塚II」「宮崎市文化財調査報告書」第37集
- 文献13：宮崎県埋蔵文化財センター 2000「右葛ヶ追遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第21集
- 文献14：宮崎県 1990「宮崎県史」資料編 考古1
- 文献15：高岡町教育委員会 1996「橋山第1遺跡」「高岡町埋蔵文化財調査報告書」第9集
- 文献16：田中熊雄 1962「綾町尾立遺跡の研究（一）・（二）」「宮崎大学学芸学部紀要」十三・十四号
- 文献17：宮崎県教育委員会 1995「学頭遺跡・八見遺跡」

（註）

註1：石井寛の御教示による。なお、当時調査に携わった橋昌信氏からも、同様のご教示を得た。

## 第2節 調査の略歴

ここでは、平成13年度に行われた本調査に限らず、台地内で行われた調査を年代順に紹介したい。

### 昭和35（1960）年

1983年に刊行された「田野町史」には（文献1）、昭和35年、地元の小学生により遺物が収集されたと記されている。巻末の鹿頭形土製品は、この時採集されている。

以来、本遺跡は地元の人々によって広く知られることとなり、町内外を問わず、多くの人が訪れては、遺物を採集したと言われている。なお、当時遺跡名は「黒草」と認識されていた。

### 昭和41（1966）年度

前川威洋氏が執筆した「九州後期縄文土器の諸問題」の中で（文献2）、耳状突起と磨消縄文を伴う曲線文が描かれた土器に、「黒草」とキャプションが打たれているが、この遺物の出典は記されていない。町内では、昭和38（1963）年に青木遺跡の発掘調査が行われているが、調査の合間を縫っては、調査関係者が、本遺跡に訪れ遺物を採集したという（註1）。出典が記されていないのは、この遺物が前川氏自身によって採集されたことを示すのではないか。

### 昭和46（1971）年度

宮崎大学考古学研究班により、9月1日から6日にかけて試掘調査が行われた（第3回）。調査指導には、当時宮崎大学教授であった田中熊雄氏があたっている。

調査の結果は、同研究会によって刊行された報告書に記されている（文献3）。この時設定されたトレンチの1ヶ所は、平成13年度に行われた全面調査によって確認された。出土遺物は綾式が主体と記されているが、実際は、後期の幅広い時期の遺物が確認されているほか、縄文早期の遺物も混入していることが、後の再整理により明らかとなった。

### 昭和53（1978）年度

宮崎県教育委員会により、九州縦貫自動車道宮崎線の建設に伴う試掘調査が実施された（文献4）。縄文後期の遺物としては、岩崎式が僅かに出土したのみであった。ただし、この調査によって、縄文前期の曾畠式も確認されている。

### 昭和60（1985）年度

田野町教育委員会から、遺跡詳細分布調査報告書が刊行された（文献5）。この中で、遺跡の名称を、付近一帯を示す「黒草」から、小字名である「本野原」に変更した。

### 平成6（1994）年度

県教育委員会により、九州農政局大淀川右岸農業水利事業のバイオライン敷設工事に伴う発掘調査が、7月4日から9月30日にかけて行われた（文献6）。調査区は、本野原台地南西部の一角に設定された。その結果、縄文晩期に相当する遺物と共に、ピットが多数検出された。

第3図 昭和46年宮崎大学トレンチ設定位図



第4図 平成3～6年度トレシチ設定位置図



第5図 平成12年度トレンドチ設定位図



年が明けて1月には、県教育委員会により、「県営農地保全整備事業元野地区」に伴う試掘調査が、本野原台地全面に行われた(文献7)。その結果、調査区内に縄文早・後・晚期の遺物が確認された。

#### 平成12(2000)年度

3月中旬、町教育委員会により、次年度より開始される県営農地保全整備事業元野地区に伴う試掘調査が行われた(第5図)。その結果、1T~10T及び13T・14Tを設定した耕作地からは、縄文後期の包含層が確認され、一部では古代の包含層も確認された。しかし、この地点はアカホヤ火山灰層(約6,300年前)と小林硬化鉱石層(約15,000年前)が消失しており、遺物包含層の下位には、焼けた角礫を含む火山灰層が分厚く堆積していた。この火山灰層について、試掘当時は始良丹沢火山灰(約25,000年前)と判断し、上層の消失は、地すべり等の自然作用を想定した。なお、20T・29Tは、アカホヤ火山灰層下位で縄文早期の集石造構が検出された。

#### 平成13(2001)年度(本調査)

4月23日、本調査を開始した。予定期工は2年半であり、台地を5分割して、半年毎に調査区を西に移動しながら整備事業を行う計画の第1期として、台地東側が調査されることとなった。調査にあたっては、耕作地の区画に沿い、南側からA区、B区、C区とした(文献8)。

調査の結果、縄文中期~後期の段階で、調査区内には100軒を超える竪穴住居が確認されたほか、環状を呈する土坑群と、その分布に沿って、径80~100mの範囲が掘り鉢状に削り取られた痕跡を確認した。また、その北部からは、土坑が2、3列に立ち並んだ状態で検出された。

竪穴住居の軒数は、これまで西日本で調査された集落遺跡としては最多であるばかりでなく、窪地造構は、初の検出例となった。調査は大きく注目を浴びることとなり、11月10日に町民を対象とした現地説明会が行なわれただけでなく、11月23日には九州縄文研究会の一環として研究者を対象とした現地説明会及び検討会が行なわれた。更に12月9日のマスコミ報道を通して遺跡は広く知られることとなり、12月15日に行なわれた一般向けの現地説明会は、大変な賑わいとなった。

#### 平成13(2001)年度(範囲確認調査)

本調査終盤に、県文化課による遺跡の範囲確認を目的とした試掘調査が行われた。この結果の詳細は、既に報告されたとおりである(文献9)。その結果、多くのトレンチで縄文後・晚期の造構を検出した。造構は、ピットだけでなく、竪穴住居や土坑と考えられるものも確認された。なお、T8~10・20は、耕作土の下位は縄文早期ローム層であり、縄文後・晚期の遺物包含層・アカホヤ火山灰層は確認できなかったが、この地点は、多くの造構が検出されていることから、開墾による削平以外に、C区で行われたような土木工事が行われた可能性が考えられる。更に、出土遺物の時期は、C区窪地造構内において頻繁に見ることができる納屋向タイプ以外に、黒色磨研土器や晚期の土器など、より新しい時期の遺物が確認された。

表1 平成12年度3月トレンチ 土層柱状模式図(1)

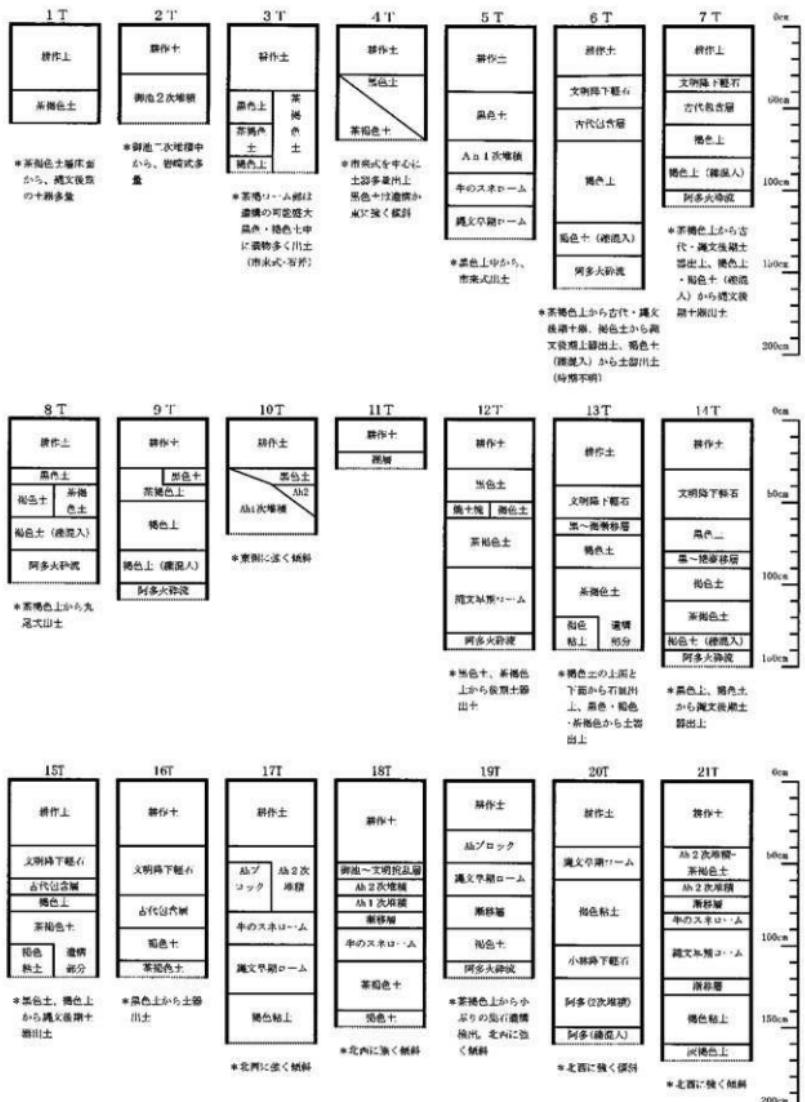


表2 平成12年度3月トレンチ 土層柱状模式図 (2)

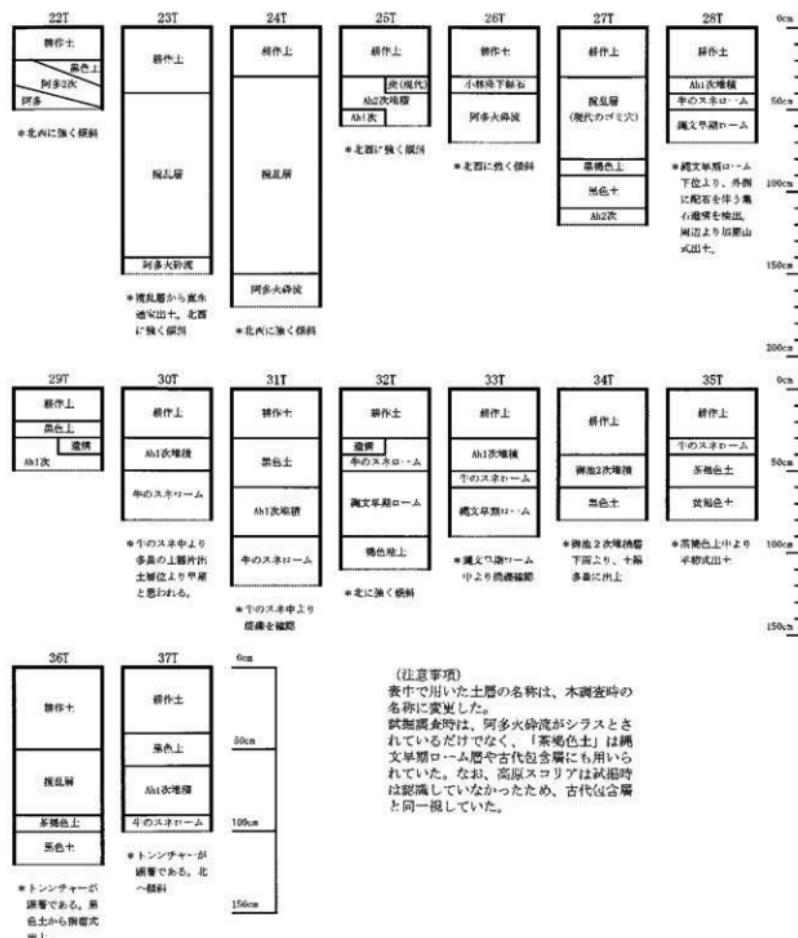


表3 本野原遺跡調査の動き

A・B区		C 区			D 区		E・F区		調査時における確認事項等			
4月 灰土	剥ぎ	表土剥ぎ			遺構			塊状				
5月 集石 検出		遺構			塊状			土坑群南側				
6月 土成・集石 住居	検出	検出	堅穴	古代八	柱	堅穴	土坑群南側	土成・集石				
7月 住居・園化		全體	柱	住居	堅穴	八		南東傾斜面上部露窓				
8月		遺構		東側		南		南東傾斜面上部露窓				
9月		検出	表土	全體	状	上	土坑	表土剥ぎ	・遺構の検出面が明らかになると共に、中央配石が検出面に接する事を確認			
		A	V	堅穴	・	上	土坑		・宮崎大学調査トレンチを確認			
					・	・	・		・堅穴状遺構が、堅穴住居とは異なると判断			
10月 深地遺構内	集石 遺構	列状	堅穴	住居八 堅穴	群	ビクト	直	上	・列状柱建物群が、古代ではなく縄文時代の大型掘立柱建物であることを確認			
	V				群	八	路		・道路状遺構から硬化面を確認			
					全	路	坑		・町民向けの現地説明会を開催			
									・九州縄文研究会の一環として、現地説明会および検討会を開催			
11月		掘立柱 遺構	遺構	堅穴 群	八	中			・新聞・TV等で報道される			
					全	世	中		・一般向け現地説明会を開催			
						世	中		・土層堆積の時期別シミュレーションを作成			
12月 明渡し		建物	分V	堅穴	群	等	世	表土剥ぎ 遺構	・土木工事の範囲を確認			
					V	世	中		・県文化課により、遺跡範囲確認調査が行われる			
1月						等	世	検出	・調査によって得られた図面や写真の整理作業開始			
						世	中		・資料整理の結果、塊状土坑群の中に貯藏穴や土壤基が含まれる事を確認			
2月		調査終了			了			シートで覆う				
3月									・九州縄文研究会長崎大会にて発表			
									・概要報告書刊行			

第6図 平成13年度調査区位図

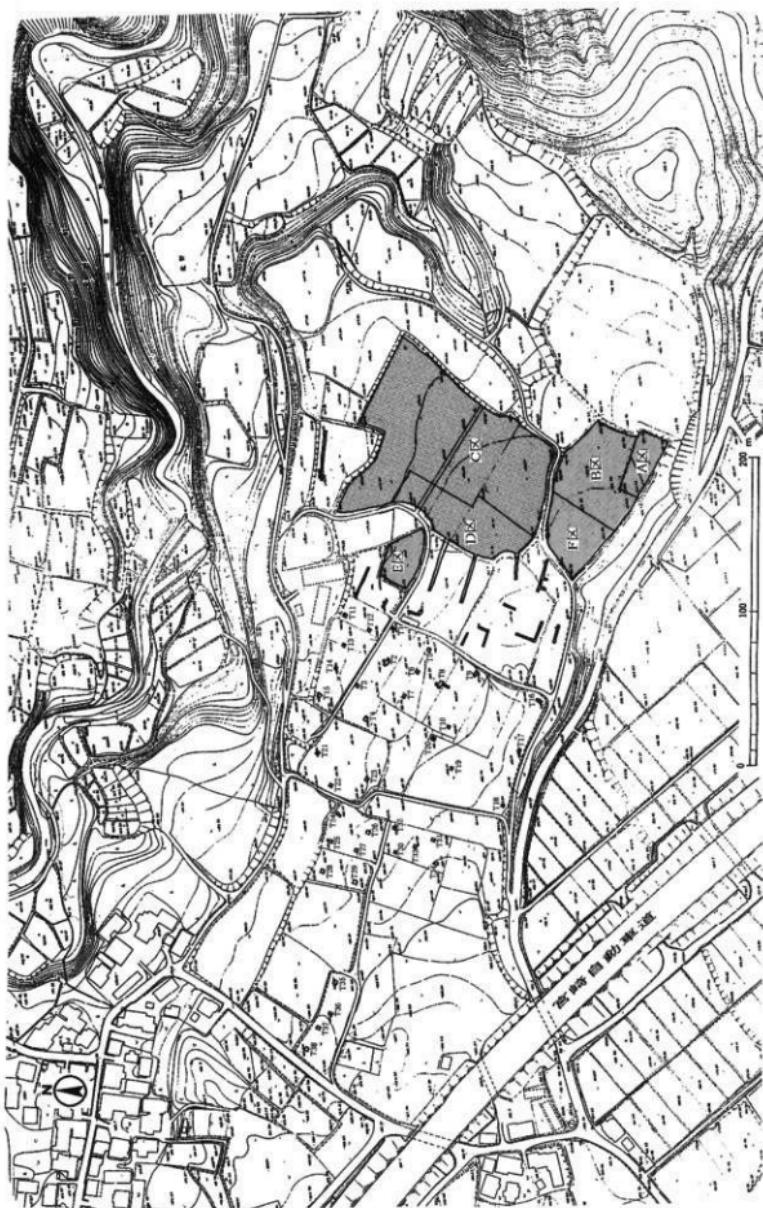


表4 平成13年度 遺跡範囲確認トレンチ 土層柱状模式図(1)

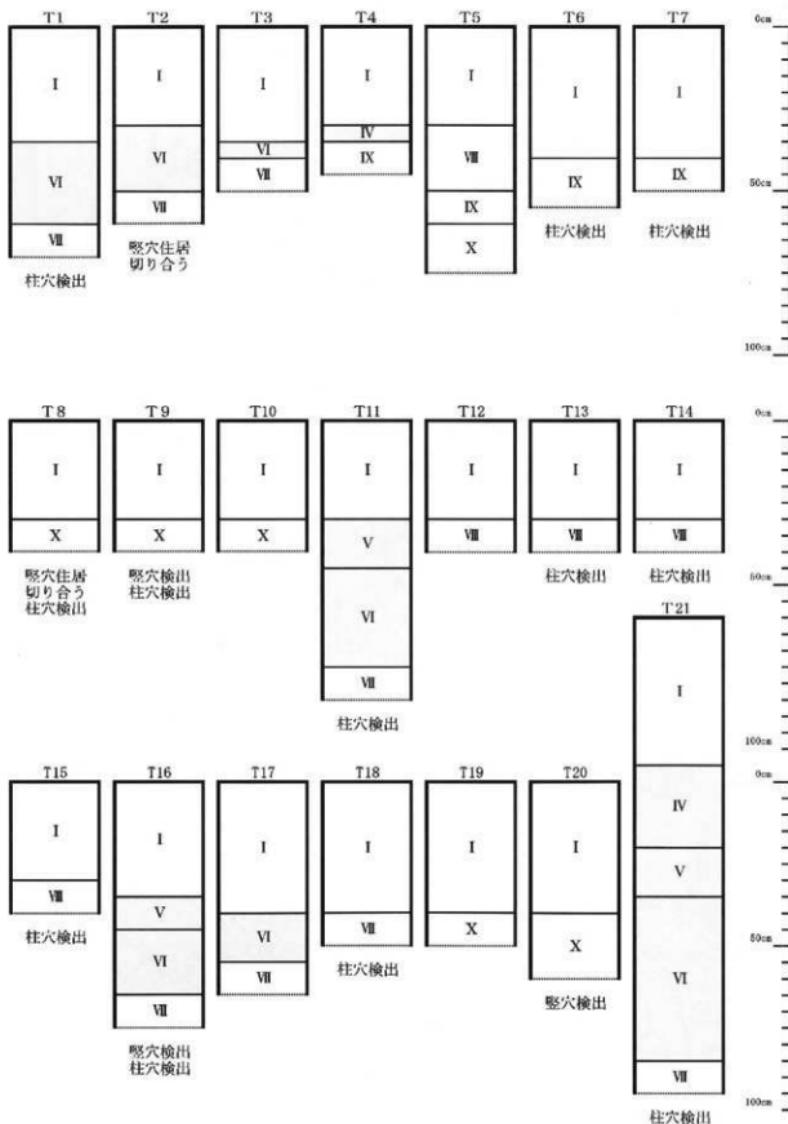
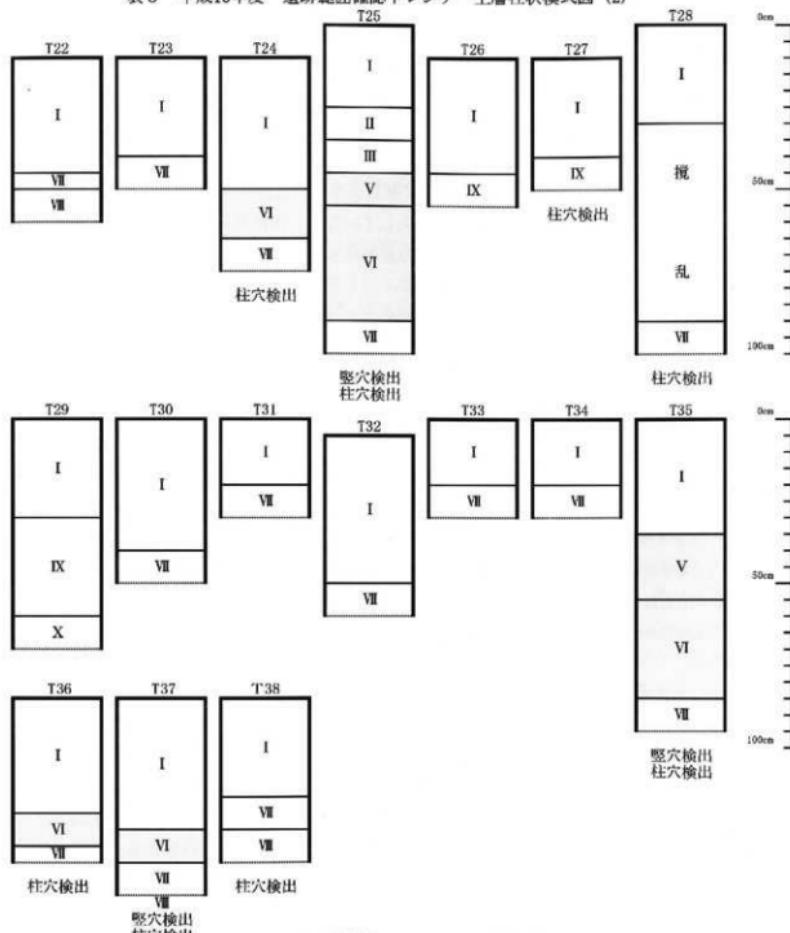


表5 平成13年度 遺跡範囲確認トレンチ 土層柱状模式図(2)



I 現耕作土	20~45cm	
II 黒色土	10cm	
(文明ボラ) 明確な層として確認できない		
III 黒色土	10cm	高原スコリアを多く含む
IV 黒褐色土	25cm	縄文時代後期・晚期包含層
V 褐色~黒褐色土	10~20cm	縄文時代後期・晚期包含層
VI 暗褐色~黒褐色土	5~50cm	縄文時代後期・晚期包含層
VII アカホヤ火山灰	5cm以上	
VIII 黒褐色~黑色土	20cm以上	縄文時代早期早期包含層
IX 黒褐色~黑色土	10~30cm	縄文時代早期早期包含層
X 暗褐色	5~30cm	縄文時代早期早期包含層

## 平成14（2002）年度（範囲確認調査）

町教育委員会により、二度にわたって行われた。

6月に、県文化課による範囲確認調査では明確に把握できなかった西側境界部分に試掘調査を行った。その結果、アカホヤ火山灰層上面でピット群が多く検出された。

9月には、北部の台地縁辺部の2箇所に試掘調査を行った。その結果、東側は削平が進んでおり、縄文後期の遺物包含層は既に消失していたが、西側からは縄文後期の遺物包含層の残存が確認されたばかりでなく、石斧の完形品も出土した。

### （参考文献）

文献1：田野町史編纂委員会 1983『田野町史 下巻』田野町

文献2：前川威洋 1979『九州縄文文化の研究』

文献3：宮崎大学史学研究部考古学研究班 1971『黒草遺跡』

文献4：宮崎県教育委員会 1979「黒草遺跡」「九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書」(一)

文献5：田野町教育委員会 1990『田野町遺跡詳細分布調査報告書』『田野町文化財調査報告書』第10集

文献6：宮崎県埋蔵文化財センター 2000『黒草第1・第2・第3遺跡 本野原遺跡 七野第3遺跡』

『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第24集

文献7：宮崎県教育委員会 1995『平成6年度農業基盤整備事業に伴う発掘調査概要報告書』

文献8：田野町教育委員会 2002『縄文集落 本野原遺跡』『田野町文化財調査報告書』第44集

文献9：宮崎県教育委員会 2002『平成13年度 農業基盤整備事業に伴う発掘調査概要報告書』

（註）

註1：岩永哲夫氏からの御教示による。

## 第Ⅱ章 調査の結果

### 第1節 調査の概略

ここでは、平成13年度に行なわれた本調査の概要を記したい。

A区は、アカホヤ火山灰層の下面まで削平されていたが、早期ローム層の露出箇所より集石造構を確認した。

B区は、南側がA区同様アカホヤ火山灰層下面まで削平されており、集石造構が露出していた。北側はアカホヤ火山灰層及びその上層の堆積が認められ、円形を呈する縄文時代後期の竪穴住居跡、及びそれに伴うピットも検出した。また、古代の煙道付竪穴住居も検出した。A・B区は、記録作業を行った後、調査を終了した。

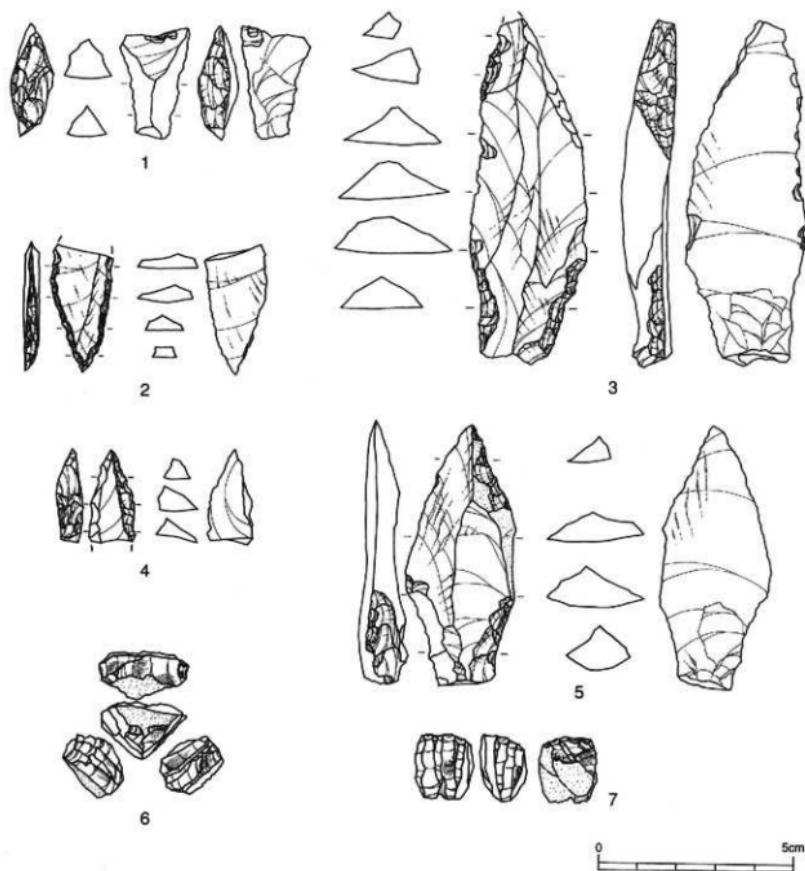
C区は、重機による耕作土剥ぎ取り後、南側に文明降下軽石の広がりが見られたため、ジョレンによる遺構検出作業を行ったが、遺構・遺物は認められなかった。この作業に並行して、C区内に2本のトレーンチを設定したが、南側に設定したトレーンチ（第1トレーンチ）の土層断面には、縄文時代後期の遺物を含む層が、西側に向かうに従い、下層を切りながら堆積する状態が観察できたが、この堆積の成因は、この時点ではまだ不明であった。

文明降下軽石層の下位には、古代の遺物包含層が認められた。遺物は、縄文後期の窪地遺構内の南東部に集中していた。この層を除去すると、古代遺物の集中部に隣接して、2間×3間の掘立柱建物が2棟並んで検出された。径約30cmの柱穴からは、縄文後期の遺物に混じって古代の土器が出土したことから、古代に建てられた倉庫等の施設と判断した。

6月には、C区北側において列状をなす土坑群を検出した。8月初旬には、C区南側に分布していた縄文後期の土坑が、調査区東側の土坑群に、弧を呈しながら繋がることが判明し、8月下旬には、土坑の弧と、縄文後期の遺物包含層によるアカホヤ火山灰層の不自然な消失の軌跡が重なることが分かった。9月には、削平の断面形は平坦ではなく擧り鉢状を呈していたことが判明し、10月に行った調査区全体の等高線作成作業によってこれを追認するに至った。更に、この検出面の直上で確認される縄文後期の土器が、北部の縄文後期遺物包含層のような時期的なばらつきがなく、後期後葉に限られていたことから、縄文後期の窪地遺構と判断するに至った。窪地遺構中央部で確認された大型の礫も、窪地遺構検出面と疊の底面が一致したために、中央配石と考えた。なお、中央配石の周囲からは、径10m未満の円形を呈する緩やかな落ち窪みも検出した。

列状掘立柱建物群は、検出面で確認されたプランがそのまま底面に達する場合が多く、覆土が環状土坑群に類似しており、C区南側の掘立柱建物の覆土とは全く異なっていたこと、覆土中の土器が後期初頭から前葉に限られることから、これも縄文時代後期と判断した。このほか、調査区北西部で確認された落ち窪みは平坦面と硬化面を伴うことから、道路状遺構と判断した。なお、南東部の傾斜面には土器が集中的に出土した。

以上の結果から、調査区内は縄文後期に大規模な集落が展開していたことが明らかとなった。C区は、一部を残してほぼ調査を終了したのち、検出面上にシラスが盛られることとなった。



第7図 旧石器時代遺物実測図

表6 旧石器時代遺物観察表

番号	器種	出土地点	長さ 打面長 (cm)	幅 打面長 (cm)	厚さ 作業面長 (cm)	石材	備考
1	台形(様)石器	縄文後期包含層	2.85	1.75	1.05	白石流紋岩	
2	ナイフ形石器	庭地内底面付近	$3.3 + \alpha$	1.6	4.05	硬質頁岩	上部欠損
3	角錐状石器	縄文後期包含層	$2.4 + \alpha$	1.2	0.7	黒色流紋岩	上部欠損
4	剥片尖頭器	縄文後期包含層	$8.9 + \alpha$	3	1.4	ホルンフェルス	尖端部欠損
5	剥片尖頭器	縄文後期包含層	6.7	2.8	1.05	硬質頁岩	
6	細石核	地表面採集(A区)	1.65	1.5	1.2	黒曜石(桑ノ木津留)	
7	細石核	南東傾斜面	1.5	1	3.15	黒曜石(桑ノ木津留)	

D区は、古代包含層から手掘り作業を開始したが、その上面で中世の掘立柱建物を9棟検出した。柱穴覆土から洪武通宝が出土したことから、中世の建物群と考えられる。古代包含層の下位にはC区と同様に縄文後期の遺物包含層が堆積し、下面には環状土坑群や堅穴状遺構を確認した。

E区・F区からは、堅穴住居と思われるプランが検出されたほか、全面に高い密度でピットを検出した。D・E・F区は、アカホヤ火山灰上面の遺構検出に留め、ブルーシートで覆った。

この調査に並行して、西側に隣接する畠をG区と仮称した上でトレンチを設定した。その結果、C区・D区で確認された窪地の範囲は直径80~100mに達することが明らかとなった。また、北部に設定したトレンチからは、調査区内で検出された。

## 第2節 時代別の概要

ここでは、調査で得られた成果について説明を行いたい。

### a. 旧石器時代

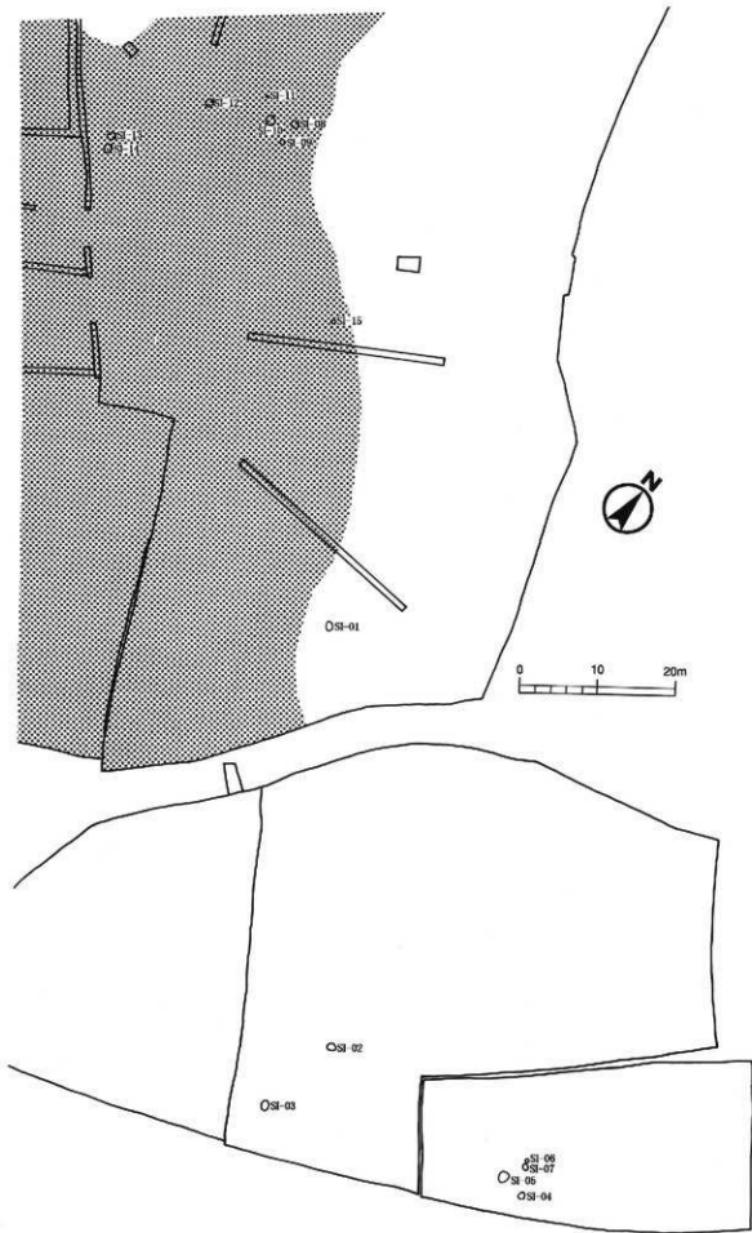
旧石器時代は、包含層に対する調査がトレンチに限られていたために、遺物はごく少量であった。確認された器種は台形（様）石器、剥片尖頭器、角錐状石器、ナイフ形石器、細石核である。

（1）は台形（様）石器である。不規則に剥離した厚手の剥片の上部を利用しておらず、両縁からの連続的かつ小規模な剥離により、断面は三角形を呈する。石材は、県北及び大分県大野川流域でよく見られる、風化面が白色となる流紋岩が用いられている。（2）はナイフ形石器である。連続的な綫長剥片剥離技術により作出された薄手の剥片の両縁に、連続的かつ小規模な剥離を急角度に行ったものである。（4）は角錐状石器の尖端部と考えられる。横長剥片を利用しておらず、両縁に連続的かつ小規模な剥離が認められる。（3・5）は剥片尖頭器である。どちらも連続的な剥片剥離技術により作出されたものであるが、（3）は基部調整が通常の剥片尖頭器に比べて小規模であり、尖端部には連続的で急角度の調整が顕著に認められる。（6・7）は、黒曜石の小礫を利用した細石核である。（6）は、平坦面を作出した後、両縁より細石刃剥離作業を行う。打面調整は、僅かではあるが両縁に認められる。（7）は、打面調整を顕著に行いながら細石刃剥離を行った痕跡が認められる。どちらの黒曜石も、基本的に透明度が高いうえに、礫内に気泡が一定量認められ、原礫の形状は小ぶりであることから、原石採集地は桑ノ木津留及びその周辺と考えられる。

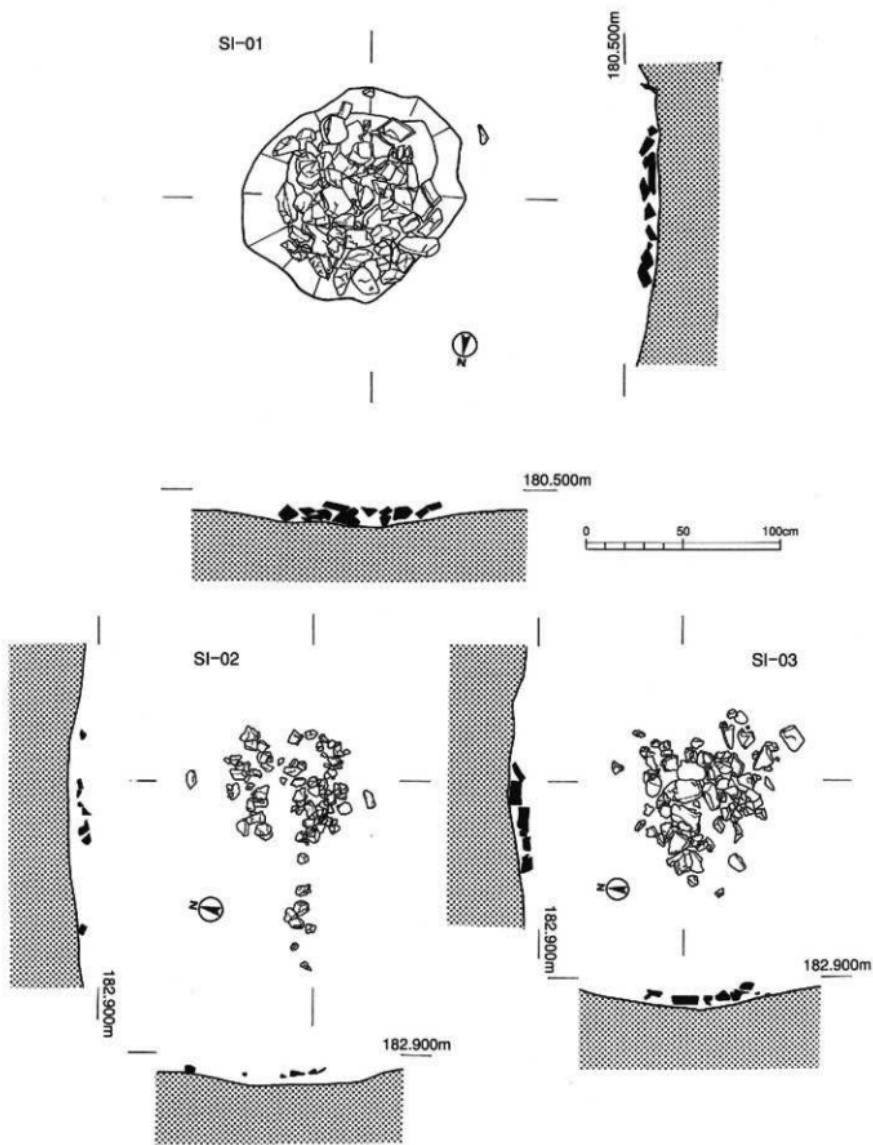
出土位置は、（2）が窪地遺構検出面付近、（6）が表面採集、（7）が南東部土器廃棄場、他はA h上位の縄文後期遺物包含層であり、全て本来の出土層位ではない。

### b. 縄文時代早期

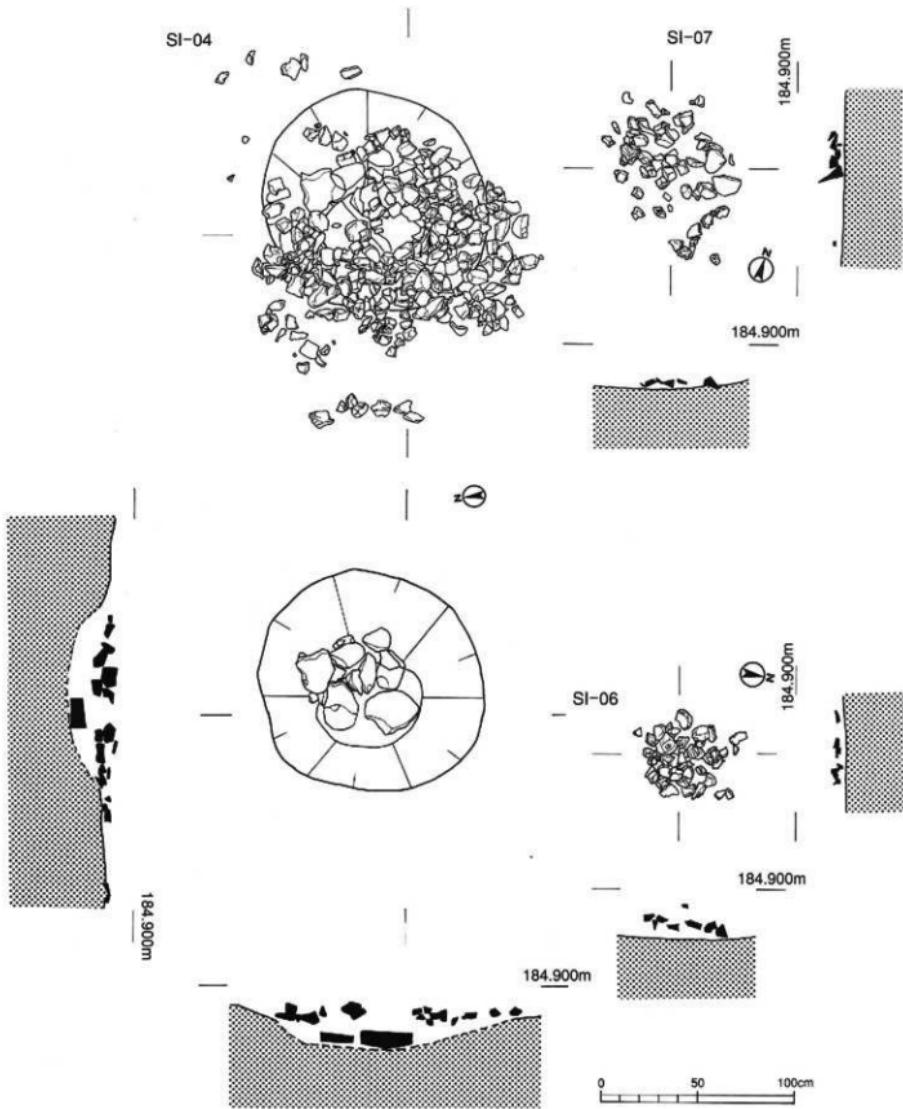
旧石器時代同様、包含層に対する調査はトレンチに限られていた。集石遺構の検出は、開墾や縄文後期の整地などの理由により、早期ローム層が露出した地点であった。



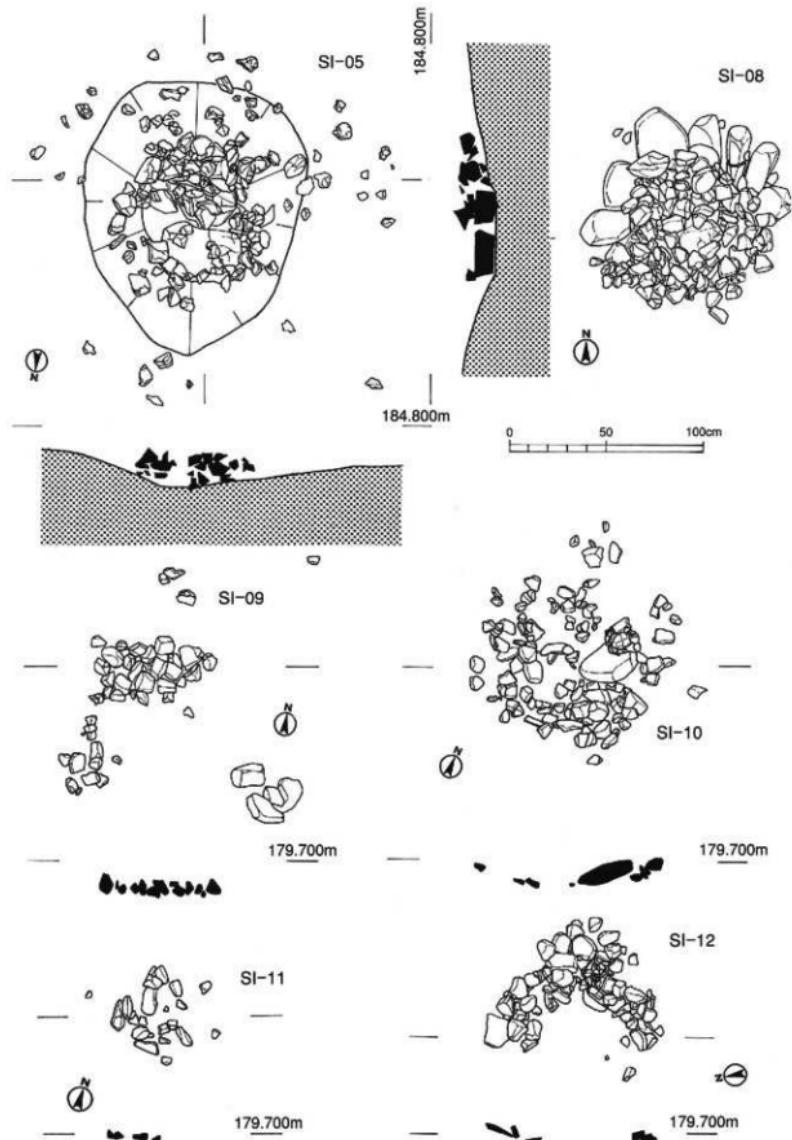
第8図 繩文早期遺構分布図



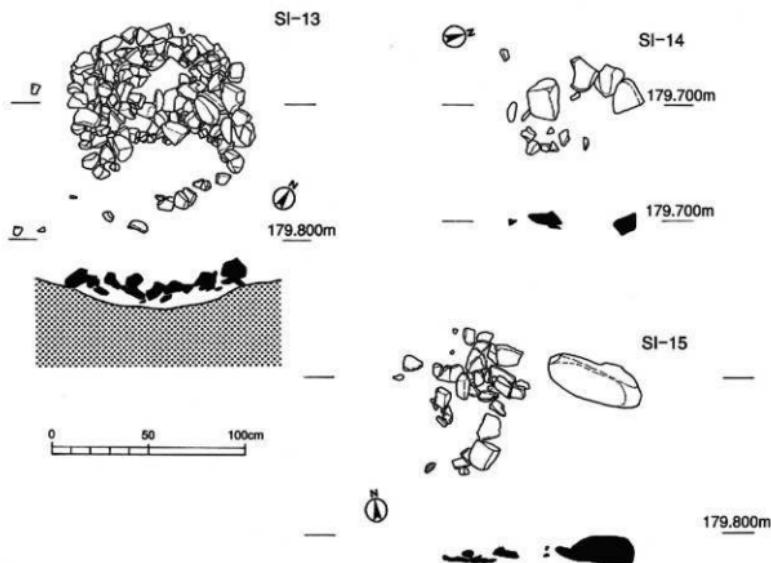
第9図 集石遺構実測図(1)



第10図 集石遺構実測図（2）



第11図 集石遺構実測図（3）



第12図 集石遺構実測図(4)

表7 集石遺構観察表

遺構No.	区	構		掘込		配石の種類	出土遺物	備考
		構の範囲(m)	確密度	規線(m)	深さ(m)			
SI-01	C	1.1×1.06	密	1.34×1.1	0.1	—	—	—
SI-02	B	1.24×0.98	疎	—	0.08	—	—	—
SI-03	B	0.98×0.96	密	—	0.1	—	—	—
SI-04	A	1.7×1.92	密	1.16×1.14	0.22	底石	—	—
SI-05	A	1.86×1.74	密	1.4×1.14	0.2	底石	—	—
SI-06	A	0.58×0.46	密	—	0.02	—	—	—
SI-07	A	0.9×0.7	疎	—	0.04	—	—	—
SI-08	C	1.1×1.08	密	—	—	一部花弁状	—	—
SI-09	C	1.3×1.24	密	—	—	—	—	数ヶ所のブロックを形成
SI-10	C	1.24×1.22	疎	—	—	—	—	—
SI-11	C	0.7×0.5	密	—	—	—	—	—
SI-12	C	0.92×0.84	密	—	—	—	—	—
SI-13	C	1.24×1.08	密	—	0.14	—	—	—
SI-14	C	0.74×0.54	疎	—	—	—	—	—
SI-15	C	1.28×0.74	密	—	—	—	—	—

### 集石遺構

15基検出した。

A,B区で検出した6基のうち、(S I - 04・05)は大型であり、疊下部に底石を伴っていた。他は小ぶりである。C区で検出した9基のうち(S I - 08)は、遺構外縁の半周分を扁平な礫が巡っていたが、その他に配石は認められなかった。また、(S I - 09・11・14)は、構成礫が極めて少なかった。

### 出土遺物

A,B区が桑ノ丸式や押型文土器が出土・採集されているのに対し、C区は加栗山式から小牧3A段階が卓越していた。なお、C区は、後期の遺物包含層からも縄文早期の土器が多く出土している。早期の土器型式は、ほかに下皆生B式、桑ノ丸式、妙見・天道ヶ尾式、塞ノ神式が確認された。

### c. 縄文時代前期～中期前葉

遺構は全く検出されていない。竪穴住居内から出土した遺物もあるが、覆土の観察から、遺構埋没中に流れ込んだものと考えられる。他に羽鳥下層式、尾田式、深浦式、森式類似土器が確認された。

### d. 縄文時代中期後葉～晩期

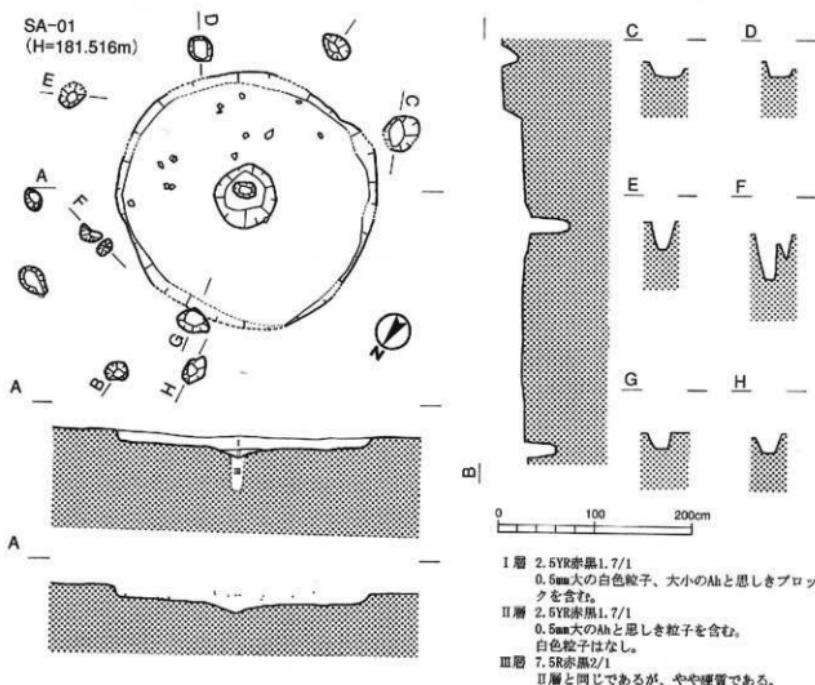
多くの遺構が検出された。以下、遺構の種類別に説明を行いたい。

#### 竪穴住居

計113軒検出された。平面形態は、方形が3軒、隅丸方形が66軒、円形が8軒、梢円形が3軒である。竪穴住居は、本来御池火山灰層上面で構築されたと思われるが、御池火山灰層は、2次堆積層との判別が困難であったことから、検出面は、最も残存の良い地点でもアカホヤ火山灰層上面であり、実際の掘り込みはもっと深かったと考えられるほか、御池火山灰層を床面としていた場合は、床面が削平され、中央土坑しか残されていないものもある。

(S A - 01)

B区北側、北へと向かう傾斜面上で検出した。径約260cmの円形を呈する。遺構中央にピットを伴う浅い土坑を、遺構周縁に11本の柱穴を検出した。床面はアカホヤ火山灰層である。



第13図 穴状住居実測図(1)

### 遺構覆土凡例

遺構図面の土層断面図のうち、竪穴住居・土坑列・竪穴状遺構については、下記の混入物が確認された層をスクリーントーンで示した。

- : 御池火山灰 (粒子。多量のみ)
- : アカホヤ火山灰層 (ブロック。多量のみ)
- : アカホヤ火山灰層 (粒子。多量のみ)
- : 粘質土 (ブロック・粒子。多量のみ)
- : 烟土・骨粉 (粒子。少量以上)

なお、複数種類の混入物が認められた場合は、トーンを重ねて示した。